

さるの恩がえし

岡本良雄・鈴木 隆・著



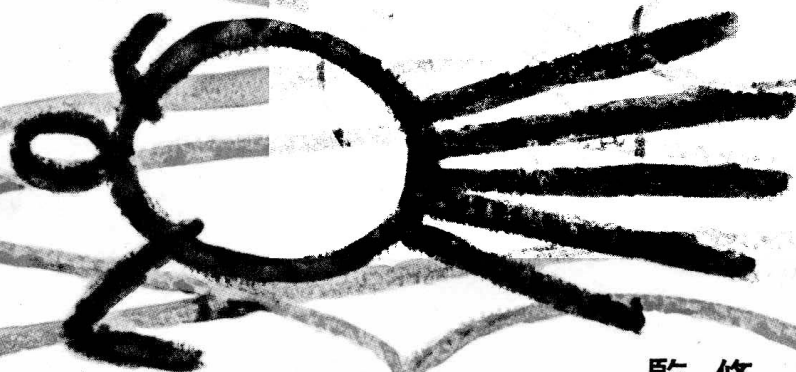
監修 田川 穂明
窪小 武老 昭実 篤

日本古典童話全集

— 3 —

さるの恩がえし

岡本良雄・鈴木 隆・著



監 修

小	川	未	明
武	者	小	篤
窪	田	路	穂
坪	田	空	治
		讓	

小 峰 書 店

基本カードをつくるための

(図書記号はあなたの学校のやり方で入れて下さい)

(分類
番号) 913

(図書
記号) (著者) ^{おかもと}岡本 ^{よしお}良雄・^{すずき}鈴木 ^{たかし}隆

(書名) さるの恩がえし

東京 小峰書店 昭 38.(1963)

226 p さしえ 22 cm

(日本古典童話全集 3)

(内容) 日本の説話の集大成である今昔物語、また、今昔より更に古い説話集の日本霊異記から、今昔16篇、霊異記4篇の作品をえらび出した。

1. 今昔物語 2. 日本霊異記

著者紹介 岡本良雄・大正2年大坂生・早大卒・児童文学・著書「八号館」「朝顔づくりの英作」その他・昭和26年度児童文学賞受賞
鈴木隆・大正9年東京生・早大卒・児童文学・著書「鼻のにげた話」その他



昭和38年8月25日 印刷

昭和38年8月31日 発行

さるの恩がえし

定価 360 円

◎ 著 者 岡 本 良 雄 (代表)
発 行 者 小 峰 広 恵
本文印刷 中教印刷株式会社
表紙口絵 合資会社 斎藤印刷所
製 本 所 小高製本工業株式会社

発行所 株式 小 峰 書 店
社 会 会 社

東京都新宿区四谷舟町六

振替東京 195544 電話四谷 (351) 1858
6390

落丁、乱丁本はお取りかえします

本のはじめに

世界の名作を知っていても、日本の古典こてんを知らない人が少なくありません。

ところで、古典というのは何でしょうか。不朽ふきゅうの名作のことです。はるかな昔から遠いすえの世までも読みつがれて、国民の心、民族みんぞくのたましいとなつていく本のことです。

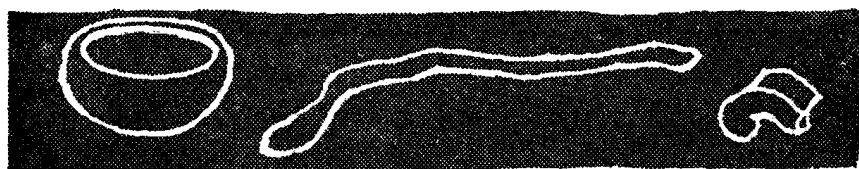
日本の古典には、世界の名作におとらないすぐれた作品がたくさんあります。しかし、そのままではむずかしくて、小学生のみなさんには、とても読みこなせません。で、児童じどう文学ぶんがくの第一線せんでかつやくしておられる作家さかの方たちをお願いして、やさしく書きあらためてもらいました。お読みになると、日本にもこんなおもしろいお話があつたのかと、おどろかれることでしょう。

日本の古典をとおして、日本のよさを知り、日本人としての心がまえを持つということ、わたしたちにとって、たいへんたいせつなことです。

昭和三十一年 春

監修者代表

坪 田 讓 治

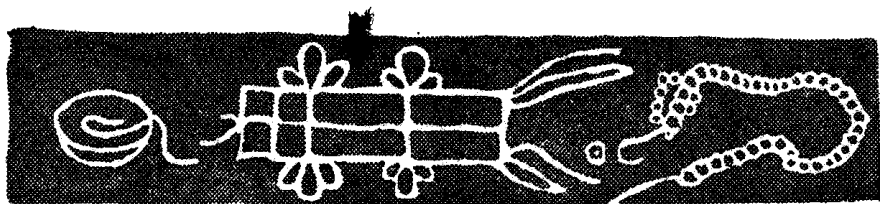


もくじ

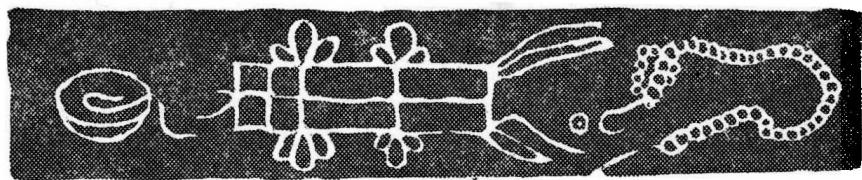
さるの恩がえし (今昔物語)

岡本良雄

- 一 うりのたね (七)
- 二 魔法のしつぱい (一五)
- 三 わざくらべ (三)
- 四 よくばり役人 (三)
- 五 人をたおすがま (四)
- 六 保昌とハカマダレ (四)
- 七 ほらびのくら (三)
- 八 しかになったおかあさん (三)
- 九 さるの恩がえし (七)



一〇	母牛のころ		(九)
一一	一本のわらしべから		(九)
一二	水の精 せい のこびと		(一〇)
一三	鬼 おに のすむお堂 どう		(一七)
一四	ふしぎな山里 やまざと		(三九)
一五	鐘 かね とどろぼう		(三六)
一六	強がり男とかげぼうし		(一五)
つかまつた雷 かみなりにほなりよういき	(日本霊異記)		鈴木 隆
一	力もちのおよめさん		(一五)
二	つかまつた雷		(一七)
三	銅像 どうぞう ぬすつと		(一九)
四	えんま大王のおつかい		(二〇)



お話の宝庫「今昔物語」

という本のおはなし

..... 水 藤 春 夫 (三)

装 幀・見返し・とびら 井 口 文 秀

口 絵 安 泰

さるの恩がえし・カッ ト さしえ 輪 島 清 隆

つかまった雷・カッ ト さしえ 池 田 仙 三 郎

さ
る
の
恩^{おん}
が
え
し

— 今^{こん}
昔^{じやく}
物^{もの}
語^{がたり} —





一　う　　　　　

むかし、おおぜいの男たちが、うりを、たくさん、馬につんで、大和の国（いまの奈良県）から京都へむかって、はこんでいました。

あつい、七月のころでした。

宇治という町まできかかると、『ならぬかきの木』という、有名な、大きな木がありました。こんもりしげった木の葉が、地面の上に青い日かげをおとしています。

「どれ、ここで、ひと休みしようじゃないか。」

男たちは、そこで、馬のせかち、うりをおろして、休みました。

「のどがかわいたな。うりをたべよう。」

と、ひとりが、いいました。

「うん、そうだ。」

男たちのはこんでいるうりは、京都の、あるえらいお方かたからのちゅうもんしなの品でした。けれども、みんなは、そのほかに、じぶんたちが食べるぶんとして、うりをいくらかずつもつてきていましたので、それを食べました。

「うまい、うまい。」

かわききつたのどの奥おくへ、うりのあまいしるが、しみこむように流れます。

すると、そのとき、どこからか、ひとりのおじいさんがやってきました。この近くに住んでいる人でしょうか。うすい着物きものに、かんたんな腰こしひもをむすんで、げたをつっかけてつえをつきながら、やってきたのです。そして、しばらく、みんながうりを食べているのを、じっと、見ていましたが、

「あのう、そのうりを、一つ、わたしにくださらぬか。とても、のどがかわいて、こまっておりますのじゃ。」

と、いいました。

「ええっ、このうりをほしって。」

男たちは、ずるそうに、顔を見あわせました。そして、

「いや、このうりは、わたしたちのものではない。これから、京都のえらいお方にさしあげにいくんだよ。」

とか、

「なあにね、ほんとうは、一つぐらい、あげたいのだけれど、おきのどくさま、そういうわけにはいかないんでね。」

などと、いいました。

「やれやれ、なんて、けちんぼうなお方たちじゃ。」

と、おじいさんが、いいました。そして、

「こんな年よりを見たら、あわれに思つて、一つぐらいくださるかと思つたのに。」

と、くびをふりながら、

「よろしい。それでは、わたしは、じぶんで、うりを作つて食べますよ。」
と、いいました。

「はっはっは。じぶんで、うりを作るって？」

「それなら、いいぜ。おじいさん。」

などと、男たちは、わらいます。

けれども、おじいさんは、すましています。そして、木ぎれをひろうと、せつせと、足もとの地面じめんを、はたけのようにならしはじめました。

(なにをするのだらう。)

みんなは、見ていました。

「ごらんなされ。こうして、たねをまきますのじゃ。」



おじいさんは、こういって、そのへんにちらばっている、うりのたねをひろって、まきました。——すると、まあ、どうでしょう。

見ているうちに、土の中から、かわいい、ふたばが、ぽつぽつと、はえだしてきたのです。

「ややっ、ふしぎだ。」

男たちは、びつくりしました。すると、また、そのふたばが、どんどのびて、長いつるになり、花がさき、大きなうりが、たくさん、なりました。

「はっはっは。おどろきなさったか。なあに、あなた方がく^{がた}ださらなかったから、わたしが、こうして、じぶんで作ったまですよ。さあ、さあ、おいしいうりですぞ、あなたたちも、ほしかったら、食べなされ。」



おじいさんは、こういつて、じぶんも食べながら、男たちにも、わけてやりました。そして、また、

「さあさあ、どなたも、めしあがれ。」

と、道を通る人たちにも、どんどんと、わけてやりました。

「ふしぎだ、ふしぎだ。」

「うん、でも、とつても、おいしいや。」

みんなは、よろこんで、食べました。そして、すっかり、目の前のうりがなくなると、
「どれ、では、帰るとしましうか。」

おじいさんは、また、つえをとつて立ちあがりましたが、そのまま、ふつと、どこかへさえるように、いなくなりました。

「ああ、なんて、ふしぎなじいさんなんだろう。」

「まるで、神さまか、魔法つかいのようじゃないか。」

男たちは、おどろきました。そして、しばらくして、

「さて。では、おれたちも、いくとしようか。」

と、男たちが、馬のせに、うりををのせようとしたときです。

「あれ、あれ。おれたちのうりがない。」

いつのまにか、さつきまで、かどにいつぱいあったうりが、きれいに、一つもなくなっているのです。

「うーむ、さては、あのじいさんは、おれたちの目をごまかして、このかどの中のうりをみんなにわけたのか。」

男たちは、やっと、気がつきました。けれども、もう、おじいさんは、どこへいったのか、わかりません。

「ああ、こまった。でも、かんじんの、うりがなくなつては、しかたがない。」

男たちは、がっかりして、また、みんなで、大和^{やまと}の方へ、すごすごと、ひきかえしていききました。

「あのおじいさんは、ほんとうに、魔法つかいだっただろうか。」

「それにしても、あのうりをはこんでいた男たちが、けちんぼうをしなで、はじめに、すこしでも、うりをやつてれば、よかつたのにね。」

と、このようすを見ていた人たちは、いいました。

それから、ずっと、のちになつても、このふしぎなおじいさんが、どこの、だれであつたかということは、とうとう、わかりませんでした。